多賀城跡調査
50周年記念

多賀城跡

―発掘のあゆみ2010―



宮城県多賀城跡調査研究所

序　文

特別史跡多賀城跡附寺跡は古くから奈良の都・平城京、九州大宰府と並び称されてきた我が国を代表する奈良時代・平安時代の遺跡です。1960 年に、宮城県、多賀城町、河北文化事業団が共同で「史跡多賀城跡発掘調査委員会」を設置して以来、現在までその実態解明と保存活用を図るための調査を継続しております。そして今年、調査開始から丁度 50 周年という大きな節目の年を迎えました。

この間、多賀城跡については、発掘調査の現地説明会開催、報告書の刊行や各種研究会での調査成果の発表、発掘調査に基づく環境整備事業、史跡公園としての公開・活用などを通し情報公開に努めてきましたが、これらの成果を県民の方々に公開するという点ではまだまだ不十分であります。そこで、50 周年を契機として以前に刊行した「多賀城跡－発掘のあゆみ－」に近年の調査成果を加えた本書を作成し、広く公開することにいたしました。

当研究所は 1969 年に設立され、多賀城跡調査研究委員会の助言を受けながら、多賀城跡や関連遺跡の発掘調査と環境整備を実施し、多大な成果を上げてきました。また、多賀城外の南面に広がる沖積地の調査が進み、方格地割に基づく町並みの展開も明らかになりました。近年の政庁跡再発掘調査や外郭線の調査では、多賀城跡の新たな姿もみえてきています。本書ではこれらのことがらを簡潔にまとめ、多賀城跡の史跡としての価値と魅力を紹介していますので、多賀城と東北古代史の理解の一助になれば幸いです。同時に、多賀城跡を始めとするこれらの遺跡にはまだまだ貴重な情報が埋もれています。こういった遺跡を壊さずに子孫に残していくことも私たちの重要な使命と考えます。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

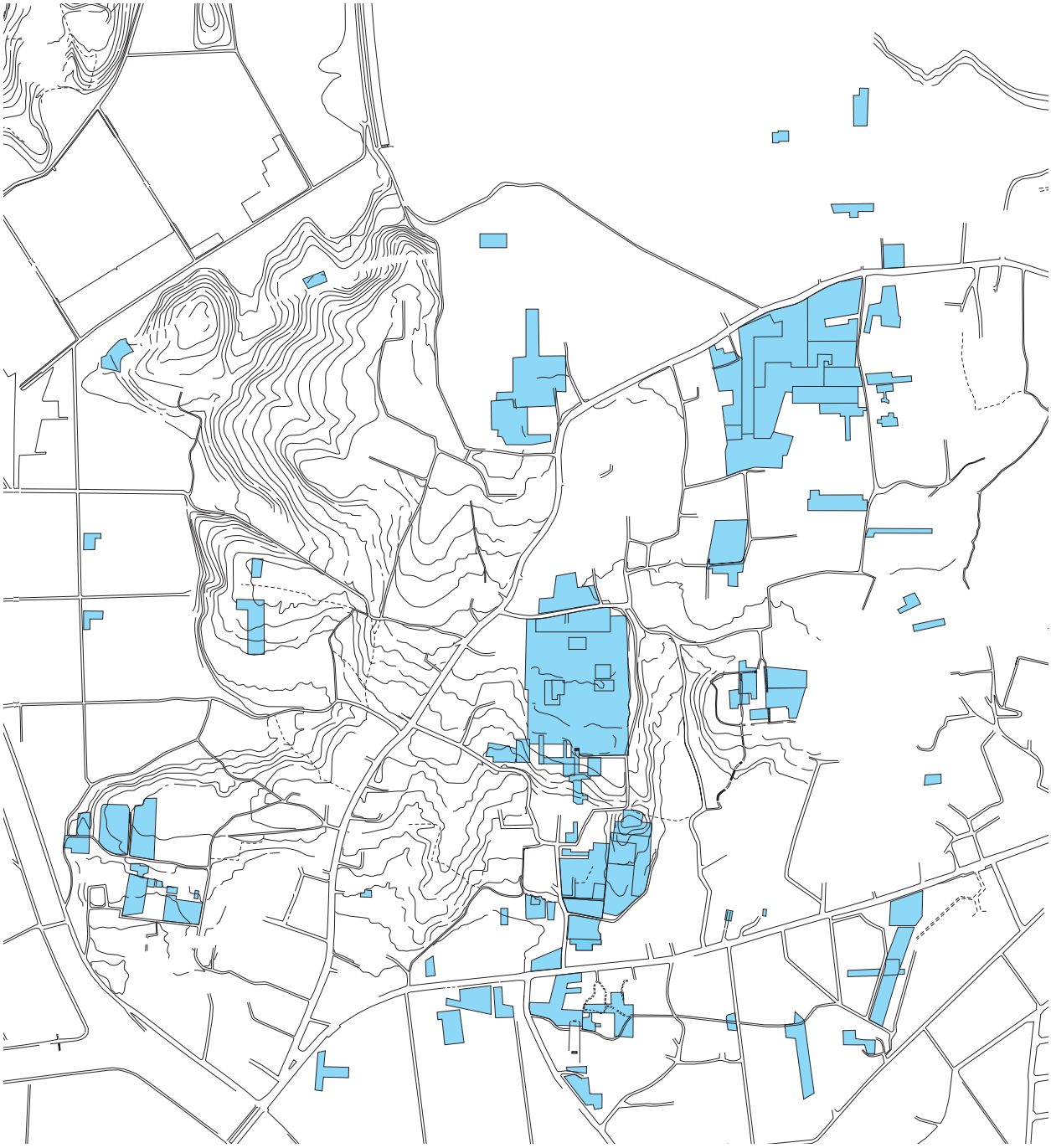
最後になりましたが、研究所設立以来ご指導、ご助言を頂いてきた多賀城跡調査研究委員会の諸先生方、文化庁・宮城県・多賀城市の関係各位、当研究所旧職員諸氏、発掘調査や遺物整理などにあたられた皆様に対し、厚くお礼申し上げます。

また、本書を作成するにあたり、お世話になりました関係機関に対し、心より感謝申し上げます。

平成 22 年 9 月

宮城県多賀城跡調査研究所

所長　阿部　博志



I はじめに

発掘開始以来50年、さまざまなことがわかってきました。多賀城跡や多賀城廃寺（→P24・25）の昔の姿がよみがえり、城南の町並み（→P26・27）が明らかになりました。また、日本で最初に漆紙文書（うるしがみもんじょ）（→P17）が発見されたりもしました。これらの成果を基に、史跡の環境整備は行われています。以下では調査成果を、テーマごとに紹介していきます。



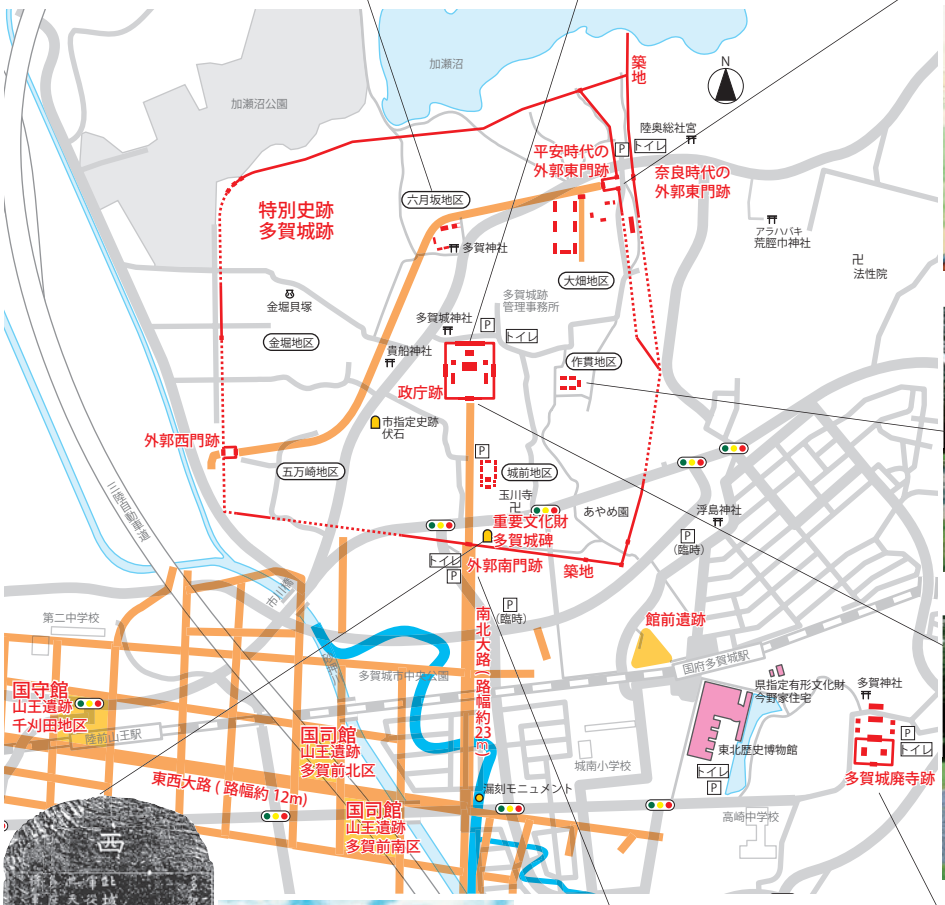
六月坂地区



政庁地区



大畑・東門周辺地区





外郭東門復元イメージ図（平安時代）



作貫地区



政庁南方地区



多賀城碑拓本



外郭南門復元イメージ図
（提供 多賀城市教育委員会）



外郭南門周辺地区



多賀城廃寺跡

1 特別史跡

多賀城跡が歴史的に重要であることは古くから有名であり、多くの学者たちの研究があります。また、大正 11（1922）年には宮城県第 1 号の国の史跡となり、昭和 41（1966）年には、史跡の中でも特に重要な「特別史跡」に昇格されました。

一方、地元の人々もその重要性を理解し、貴重な文化財である多賀城跡を大事に守ってきました。近年、発掘調査などで様々なことが明らかになり、ますますその重要性が高まっています。現在に生きる私たちは、この貴重な文化財を未来の人々に大切に残していかなければなりません。



発掘前の政庁正殿跡（1963 年）
多賀城跡で最も重要な建物跡。石碑を建て、柵を巡らすなど地元の人たちによって大切に守られてきた。



多賀城碑覆屋
江戸時代に多賀城碑を保護するために建てられたものを、明治 8（1875）年に建て替えた建物。現在の建物は平成10（1998）年に改修されたもの。

2 発掘調査

多賀城跡・多賀城廃寺の発掘調査は昭和 36（1961）年から開始され、昭和 44（1969）年からは宮城県多賀城跡調査研究所が継続的に発掘調査を行っています。

調査の成果は現地説明会、研究所年報、インターネットのホームページなどで公開される他、東北歴史博物館で展示・解説されています。

ホームページ URL《http://www.thm.pref.miyagi.jp/kenkyusyo/》



政庁東楼（とうろう）跡の調査風景（1969 年）
研究所設立初年度の調査。地面を丁寧に削り、遺構を見つけ出す。



現地説明会（2009 年）
調査の成果を現地で説明し、公開している。


5・6・7 次 (年報 1969)


7・8・9・10・11 次
(年報 1970)


12・13・14 次（年報 1971）


15・16・17・18 次
(年報 1972)


19・20・21・22 次
(年報 1973)


23・24 次（年報 1974）


25・26・27 次（年報 1975）


28・29 次（年報 1976）


30・31 次（年報 1977）


32・33 次（年報 1978）


34・35 次（年報 1979）


36・37 次（年報 1980）


38・39・40 次（年報 1981）


41・42 次（年報 1982）


43・44 次（年報 1983）


45・46・47 次（年報 1984）


46・48・49 次（年報 1985）


49・50・51 次（年報 1986）


50・52・53 次（年報 1987）


54・55 次（年報 1988）


56・57 次（年報 1989）


58・59 次（年報 1990）


60・61 次（年報 1991）


62・63 次（年報 1992）


64 次（年報 1993）


65 次（年報 1994）


66 次（年報 1995）


67 次（年報 1996）


68 次（年報 1997）


69 次（年報 1998）


70 次（年報 1999）


71 次（年報 2000）


72 次（年報 2001）


73 次（年報 2002）


74・75 次（年報 2003）


76 次（年報 2004）


77 次（年報 2005）


78 次（年報 2006）


79 次（年報 2007）


80 次（年報 2008）


81 次（年報 2009）

研究所年報の表紙を飾った写真を集めました。

Ⅱ 多賀城跡

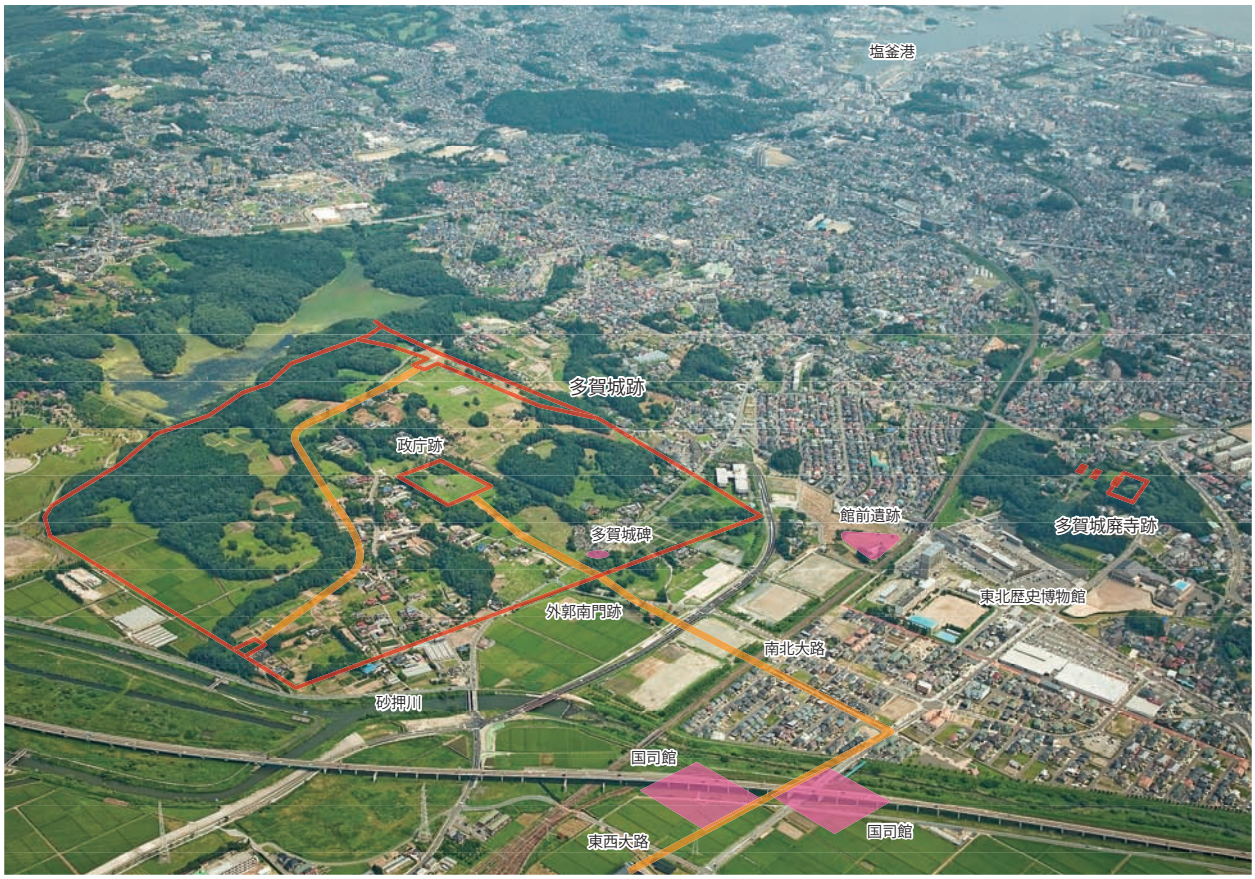
1 場　　所

多賀城跡は仙台市の北東約 10km、仙台平野を一望の下に見渡せる、多賀城市市川・浮島の丘陵上にあります。いびつな四角形の範囲を築地塀（→ P11）で区画しており（東辺約 1050m、南辺約 870m、西辺約 660m、北辺約 780m）、ほぼ中央に政庁（→ P8）があります。

この場所は、すぐそばを七北田川と砂押川が流れ、塩竈の港にも近く、交通の要所だったようです。



多賀城跡の位置



多賀城跡航空写真（南西から）

2 創建と変遷

多賀城碑（→P22）によれば、神亀元（724）年に、当時の東北地方の最高責任者である大野東人によって創建されたとされています。

その後、大きく3回改修されています。1回目は藤原朝獦による天平宝字6（762）年の大改修で、2回目は宝亀11（780）年に多賀城跡が焼き討ち*に遭ったための復旧です。3回目は貞観11（869）年の陸奥国大地震*からの復興です。

Ⅰ・Ⅱ期は奈良時代、Ⅲ・Ⅳ期は平安時代です。この後、多賀城跡は11世紀中頃までは存続していたようです。この間に、灰白色の火山灰*が降り積もっています。

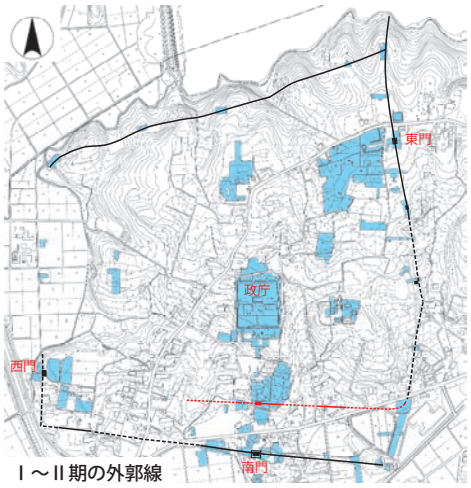
＊焼き討ち…宮城県北部の栗原郡の長官であった伊治公呰麻呂らが反乱を起こし、多賀城に放火し、物資を略奪した。

＊地震…多くの建物が壊れ、津波が多賀城下に押し寄せたと記録されている。

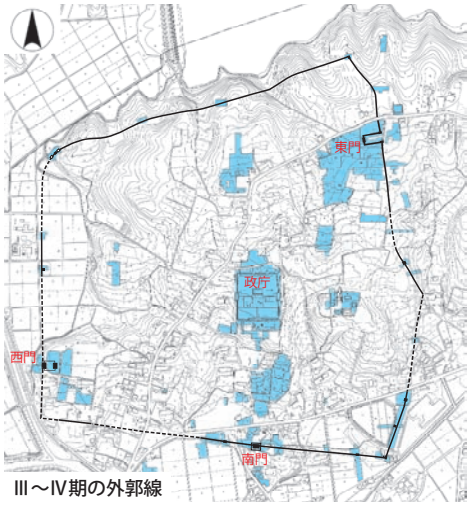
＊火山灰…十和田湖（青森・秋田県）を噴源とし、915年に降ったと考えられている。

多賀城の変遷

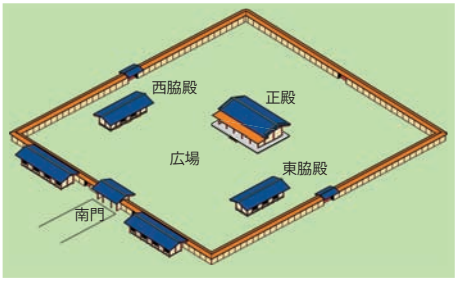
Ⅰ期 ：創建（724）～大改修（762）
Ⅱ期：大改修～火事（780）
Ⅲ期：火事の復旧・整備～地震（869）
Ⅳ期：地震の復興～11世紀中頃



Ⅰ～Ⅱ期の外郭線
赤色部分は時期を特定できていないが、多賀城創建当初の外郭南辺である可能性がある。

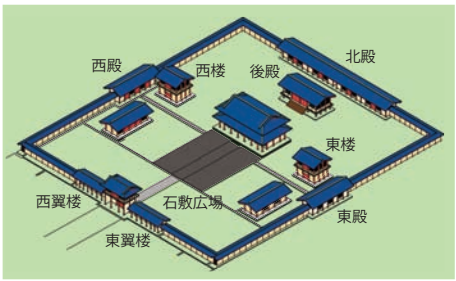


Ⅲ～Ⅳ期の外郭線



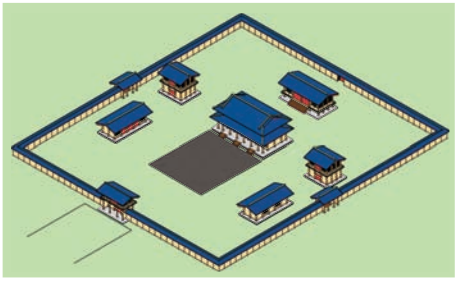
Ⅰ期政庁　大野東人によって創建された。主要な建物には瓦が葺かれていた。

神亀元（724）年
下伊場野窯跡群・木戸窯跡群・日の出山窯跡群（→P28）などで瓦が焼かれる
この頃東山官衙遺跡（→P29）造営



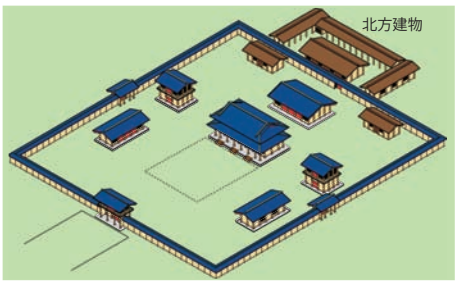
Ⅱ期政庁　藤原朝獦によって大改修された。建物や築地塀は礎石式となり、新たに東・西楼、後殿などが加えられた。築地塀は瓦葺き、広場は石敷きとなり、石組み排水溝が敷設されるなど、全期を通して最も機能性と装飾性を兼ね備えた政庁である。

天平宝字6（762）年
多賀城碑
城前地区の役所（→P13）がつくられる
桃生城跡完成（759年）（→P29）
伊治城跡完成（767年）（→P29）



Ⅲ期政庁　伊治公呰麻呂の焼き討ち後に再建された。

宝亀11（780）年
暫定的な復旧
本格的な再建
城内の整備（大畑・作貫・城前・六月坂地区の役所）（→P13）
城外に町並みができる（→P26・27）



Ⅳ期政庁　陸奥国大地震後に復興された。政庁北側に新たに建物が建てられた。

貞観11（869）年

火山灰降る（915年）

政庁変遷イメージ図

3 国府多賀城

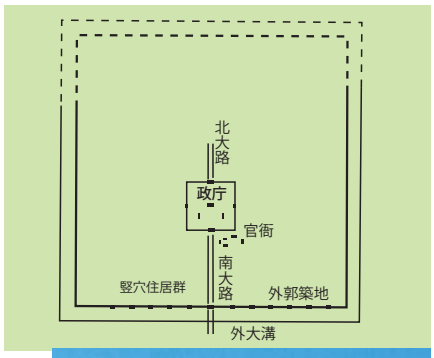
多賀城跡は、奈良・平安時代の陸奥国*（現在の宮城・福島県）の国府で、長官は出羽国（現在の山形・秋田県）をも管轄していました。また、奈良時代には鎮守府も置かれていました。

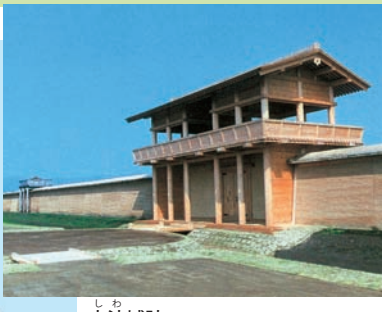
国府は、それぞれの国（現在の都道府県にあたる）に置かれた行政組織で、さまざまな仕事をしていました。

鎮守府は兵士などを指揮監督する役所で、軍事を担当していました。奈良時代には多賀城跡に設置されていましたが、平安時代初めに胆沢城（岩手県奥州市）に移転したと考えられています。

したがって、多賀城跡は東北地方の行政や軍事の中心地だったと考えられます。

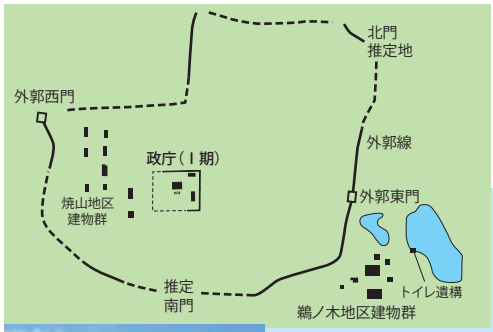
＊陸奥国…平安時代には岩手県の南半部も含む。





志波城跡
（写真提供 盛岡市教育委員会）
築地塀と大溝で周囲を区画し、内部に政庁がある。延暦22（803）年に、坂上田村麻呂によって造営された。
写真は外郭南門と築地塀で、門は二階で兵士が警護できるように復元されている。

秋田城跡
天平5（733）年に完成した出羽国最北の城柵。築地塀で周囲を区画し、ほぼ中央に政庁がある。
写真は復元されたトイレ遺構で、鵜ノ木地区の迎賓施設には渤海使が使用した水洗トイレがあった。

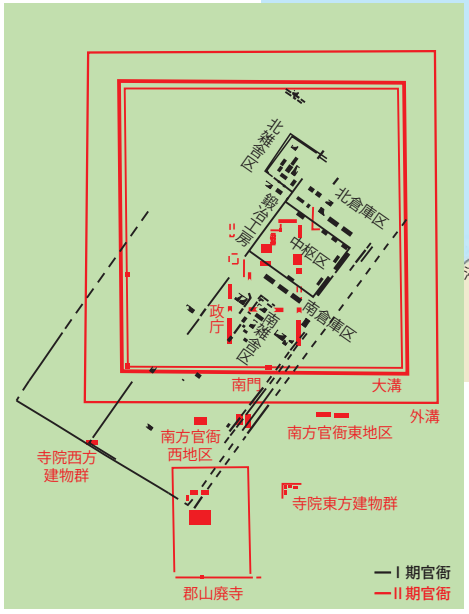




写真提供
秋田城跡調査事務所



多賀城跡と主要な城柵・官衙遺跡
律令政府は城柵や官衙（役所）をつくりながら、支配地を北へ広げていった。





郡山遺跡Ⅱ期官衙
（写真提供 仙台市教育委員会）
多賀城跡が成立するまでの陸奥国府。材木塀と大溝で周囲を区画し、内部に建物を配置している。石組池はエミシの服属儀礼に用いられたとする意見がある。

当時の国家は律令（律は刑法、令は民法と行政法）と呼ばれた法律を基礎としており、東北地方北部には律令政府にしたがわない人々が住んでいました。政府側では彼らをエミシと呼び、こういった人々を支配するための拠点として、各地に城柵が造られました。宮城県内には桃生城や伊治城（→P29）などが造られています。

多賀城跡は各地の城柵も管轄しており、城柵でもあったと考えられます。

政府とエミシの間ではたびたび武力衝突が起こりました。特に奈良時代後半から平安時代初めにかけての衝突*は長期間にわたり、大規模でした。

＊衝突…政府側の責任者は坂上田村麻呂で、エミシ側の中心人物は大墓公阿弖流為（アテルイ）。



桃生城政庁正殿跡
建物の雨落溝には多量の焼け土と炭が落ち込んでおり、建物が火災に遭ったことを示している。



兵士が使った武器　上は刀、下は弓の一部、右は鉄製の矢。



政府とエミシの武力衝突



伊治城跡出土の土器と武器（栗原市教育委員会 蔵）
竪穴住居からまとまって見つかったもの。



弩の発射装置（栗原市教育委員会 蔵）
弩は発射台と装置を持つ弓のことで、飛距離・貫通力に優れ、命中率が高い。西欧ではクロスボウ(ボウガン)と呼ばれる。日本で初めて伊治城跡で発見された。



弩を構えた兵士

4 城内の様子

A 政　庁

政庁は多賀城内で最も重要な場所で、大事な政務や儀式が行われました。

多賀城跡のほぼ中央にあり、東西 103m、南北 116m の長方形に築地塀を巡らせ、内部に正殿、脇殿、後殿、楼などを計画的に配置しています（→ P5）。政庁の造営にあたっては、大規模な土地の造成が行われていました。



政庁跡航空写真　築地塀で囲まれたなかに、正殿や脇殿などがある。



正殿跡
政庁の中央やや北寄りにある。各期を通じて位置は変わらない。高い基壇（土を突き固めた基礎の土壇）上に建てられており、階段がつけられていた。

石組みの階段



後殿跡
正殿の後方にある。Ⅱ期に設けられ、ほぼ正殿と中心軸を合わせて造られている。３箇所の礎石が残る。

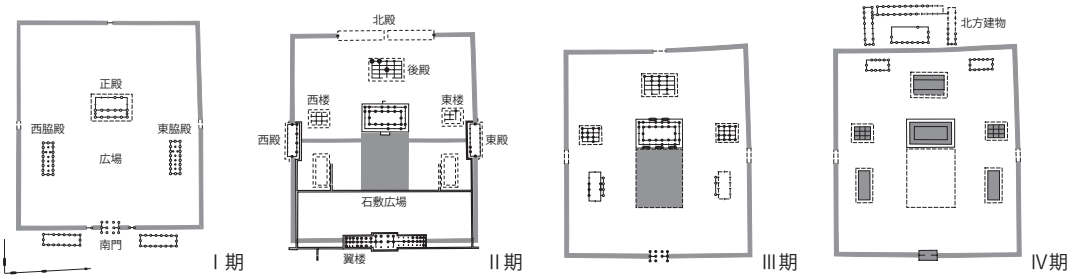
北東隅の礎石



西脇殿跡　正殿の西前方にある。正殿と同様に各期を通じて位置は変わらない。



東楼跡　正殿の東方にあり、Ⅱ期に設けられている。



政庁跡変遷模式図

Ⅰ期は掘立式*の建物ですが、Ⅱ期以降は礎石式*の建物となり、主要な建物には瓦が葺かれていました。Ⅱ期の建物は火事に遭っています。

正殿は二階建てを思わせる立派な建物で、東西両側に脇殿が配置され、これらの建物に囲まれた空間は、広場として重要な儀式の場となりました。Ⅱ期には広場が石敷きになっています。

政庁からはたくさんの瓦（→ P14）を始め、土器（→ P15）や硯（→ P16）なども発見されています。土器は茶碗型のものが大部分で、儀式に使われたものです。一方、硯は政庁で事務が行われたことを示しています。

＊掘立式…地面に直接穴（柱穴）を掘り、柱を立てて建築する方法。
＊礎石式…礎石を据え、その上に柱を立てて建築する方法。基壇上に建てられる場合が多い。



塼
レンガのように、積んだり敷き詰めたりして用いられた。鹿が浮き彫りになっている。



焼瓦層
伊治公呰麻呂による火事の跡。焼けた土と多量の瓦が堆積している。



築地塀
西辺築地塀と内側の石組み排水溝。手前の石はⅡ期の建物の礎石。





政庁南面の石垣
政庁の南西部では大規模な盛土造成が行われており、その南端と西端は石垣で土留めされていた（写真奥が政庁南辺築地塀）。

政庁南門跡
政庁の正門で、各期を通して同じ場所にある。

B 門と大垣

多賀城跡の周囲は塀（大垣）でいびつな四角形に囲まれており、東・南・西には門が開かれていました（北門は未発見）。

(1) 南　門

南辺築地のほぼ中央にあり、Ⅱ期以降は礎石式の八脚門（はっきゃく）*で、二階建ての豪華な門です（Ⅰ期の様子は不明）。多賀城跡の正門であり、政庁とは直線道路（→P12）でつながっていました。

近年、南門から120ｍ内側で新たな門（八脚門）を発見し、これに接続して東西に延びる塀も確認しました。多賀城創建当初の外郭南門と塀である可能性があります。

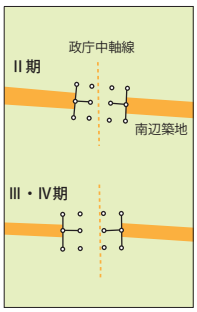
＊八脚門…前後４本ずつ８本の柱で屋根を支える構造の門。大きな寺院や役所などにあり格式が高い。



外郭南門
削平が著しいが、礎石を安定させるための石（根石）が残っている。



外郭南門復元イメージ図
（提供 多賀城市教育委員会）
多賀城の正門として、豪華な造りである。



外郭南門の変遷
Ⅱ期には築地塀と同じ方向であるが、Ⅲ期には政庁～南門間の道路と同じ方向になる。

(2) 東門と西門

両者とも礎石式あるいは掘立式の八脚門で、時期によって場所を変えています。

東門は東辺の北寄りにあり、Ⅱ期には礎石式の八脚門で、Ⅲ・Ⅳ期には大きく内側に入り込んだ場所に移動します（→P1）。

西門は西辺の南寄りにあり、東門と同様にⅢ期には内側に入り込んだ場所に移動します。

両者ともに門の内側には役所群（→P13）が存在し、東西の門を結ぶ道路が尾根上につくられていました（→P12）。



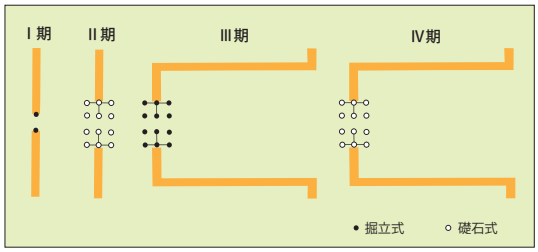
外郭東門
左側の石がⅡ期の門の礎石。石組みの雨落溝が巡る。中央のやや盛り上がった部分がⅢ期の築地塀で、Ⅱ期の門を覆っている。



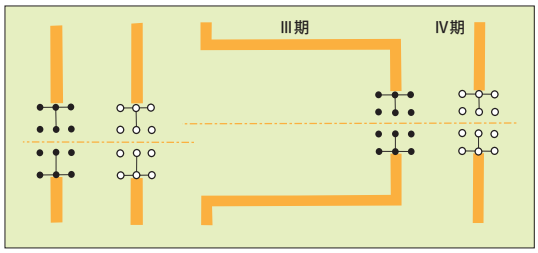
外郭東門
Ⅲ期の掘立式の門とⅣ期の礎石式の門。



外郭西門
掘立式と礎石式の門がある。



外郭東門の変遷　Ⅱ期は礎石式の八脚門。Ⅲ・Ⅳ期は内側に入り込んだ場所で、Ⅲ期は掘立式、Ⅳ期は礎石式の八脚門となる。



外郭西門の変遷　最初は掘立式の八脚門、次は礎石式の八脚門である。Ⅲ期は東門と同様に内側に入り込んだ場所で掘立式の八脚門となり、Ⅳ期は最初とほぼ同じ場所で礎石式の八脚門になる。

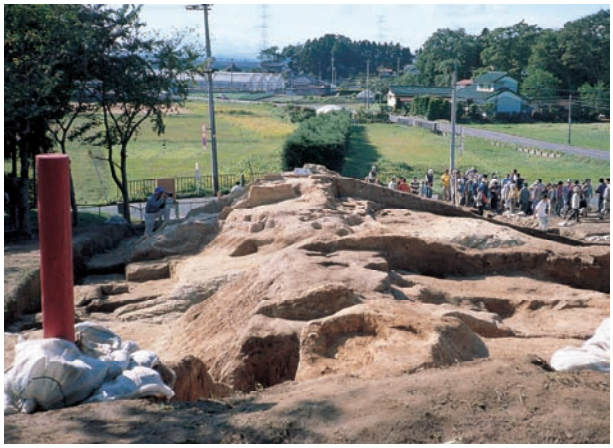
(3)大　垣

多賀城跡を区画する施設は築地塀と材木塀です。

築地塀は土を突き固めて高く積み上げ、屋根をかけた土塀で、高さは４～５ｍ程あります。屋根には瓦が葺かれていました。

材木塀は材木を密接して立て並べた塀で、東辺と西辺の低湿地部分にあります。Ⅲ期には材木塀が造られていますが、それ以前はこれらの場所には区画施設がなかったかもしれません。

築地塀は当時「大垣」と呼ばれていました。南辺築地塀のそばから「大垣」と書かれた土器が見つかり、多賀城跡でも同様に呼ばれていたことがわかりました。



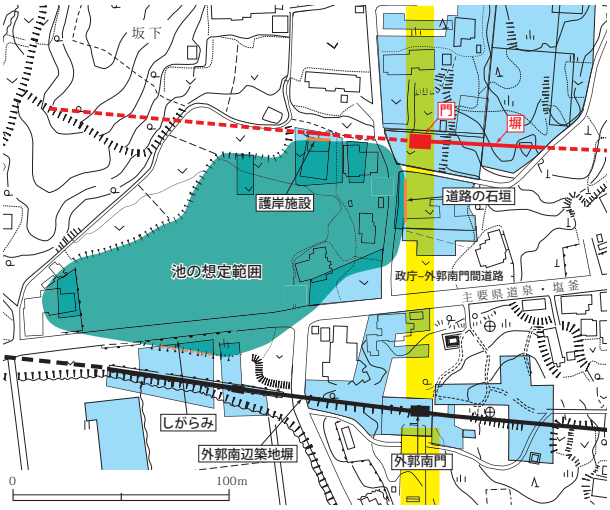
外郭南辺築地塀
外郭南門西側。低湿地にまで築地塀がつくられている（木が植えられている部分）。手前の赤い棒は南門の柱の位置を示す。



築地塀断面
土を何層にも突き固めている。



「大垣」墨書土器
須恵器の坏（お椀）の底部に書いてある。



外郭南辺の移動　外郭南門の約120m内側で、新たな門と塀を発見した。外郭南辺が時期によって位置を大きく変えているようで、８世紀後半頃にはこの塀の基礎部分を利用して池の護岸施設がつくられている。



外郭南辺の排水施設　築地下の排水暗渠には、ケヤキ材を刳り貫いた木樋が用いられている。



塀の基礎工事　低湿地では、沈下防止のために丸太材を筏状に組み合わせた塀の基礎工事が行われている。



外郭南辺築地塀（東部）
手前の柱穴は築地に取り付く櫓。



外郭北辺築地塀基壇の石垣
基壇の土留めに石垣が積まれている。



材木塀
西辺中央部。平安時代につくられ、外側に溝が掘られている。

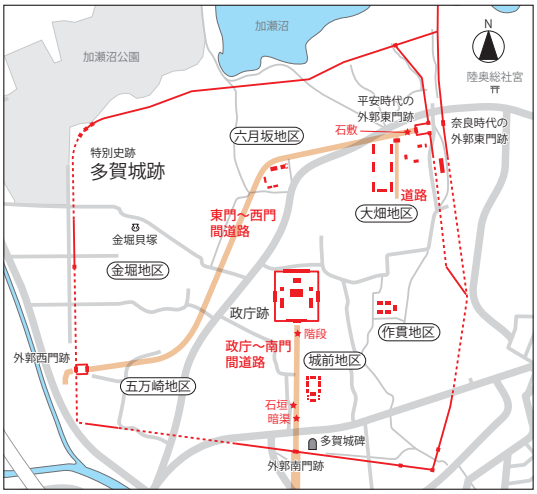
C 道　路

政庁～南門間、東門～西門間、大畑（おおはた）地区の道路が見つかっています。

政庁～南門間はメインストリートで、I・Ⅱ期は幅 13m 程、Ⅲ期以降は 23m 程で、高い部分を削り、低い部分に盛土して直線的につくられています。政庁南門の前は傾斜がきついため、階段となっていました。また、低い部分には土留めの石垣や排水のための側溝・暗渠が設けられていました。

東門～西門間の道路は、政庁の北側を通る尾根上につくられた道路です。

大畑地区の道路は、大畑地区の役所（→ P13）内の道路で、東門～西門間の道路との交差点には門がつくられています。



城内の道路



政庁下の階段
玉石を並べてつくっている。次ページ航空写真に復元整備された階段が写っている。



道路につくられた暗渠排水施設
自然石を側石（かわいし）とし、丸太材や丸太を割った材を横に並べて蓋としたもの。手前の集石は改修時に設けられた暗渠の集水桝（ます）。



東門付近の道路舗装
東門から城内へ入ったすぐの場所には、石や瓦の破片を敷き詰めた舗装路面が残る。斜面下方にあたる道路の南側には排水のための側溝が付く。



道路西端の石垣
長さ80㎝前後の割石と自然石を縦・横の目地が通るように積み上げ、隙間に小石を詰めたもので、見栄えが意識されている。

D いろいろな役所

城内には、儀式の場である政庁の他に、実際に事務をする役所が、大畑地区、城前地区、作貫地区、六月坂地区、金堀地区、五万崎地区などに設置されていました。大部分がⅢ期以降に成立しており、この頃に体制が整備されたことがわかります。

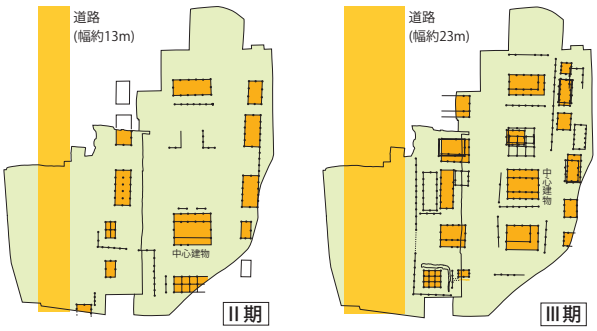


航空写真
外郭南門上空から見る。中央が政庁で、その下に城前地区がある。政庁の右には作貫地区、その上には大畑地区がある。

(1) 城前地区

政庁の南で、メインストリートの東側にあります。

Ⅱ期につくられて、伊治公呰麻呂の反乱で火事に遭い、Ⅲ期に再建されています。Ⅱ期に整備された役所が存在するのはいまのところ城前地区だけです。

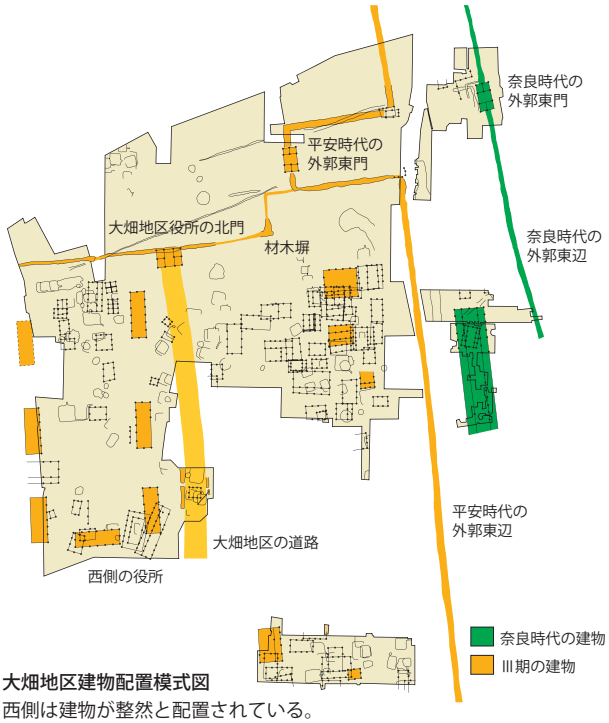


城前地区建物配置模式図
Ⅱ期の役所は伊治公呰麻呂の乱によって焼けている。Ⅲ期にはほぼ同位置で建て替えられており、建物が増えて最も充実した時期を迎える。

(2) 大畑地区

外郭の東門を入ったところにあります。材木塀で囲われた役所がⅢ期（９世紀前半頃）につくられます。中央には道路があり、東西に二分割されています。西側には、７棟の建物が「コ」字形に配置されています。東側からは米に関する木簡が見つかっており、米の受給に関する仕事をしていたようです。

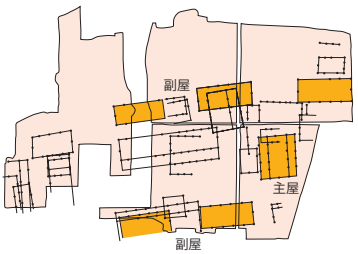
また、大畑地区には多数の竪穴住居や鍛冶工房があり、役所の事務だけではなくさまざまな仕事をしていたと考えられます。



大畑地区建物配置模式図
西側は建物が整然と配置されている。

(3) 作貫地区

政庁から沢を隔てた東の丘陵上にあります。Ⅲ期になると、５棟の建物が政庁に向けて「コ」字形に配置されます。



作貫地区建物配置模式図（Ⅲ～Ⅳ期）
主屋と南・北各２棟の副屋は同位置で２度建て替えられている。

5 さまざまな遺物

儀式や事務、日常生活などにいろいろなものがつくられ、使われています。ここで紹介するものの他に、金属製品（鋤・斧・錠）や木製品（櫛・下駄・容器・柄）などがあります。

A 瓦

当時は寺院や役所の中の特に重要な建物は瓦葺きでした。一般の建物や住居などは板や草で屋根を葺いていました。

長方形をした平瓦と、筒を半分に割った形の丸瓦とがあり、組み合わせて屋根に葺きます。軒先にでる瓦には飾りがつけられており、製作者や時代によって模様が違います。

Ⅰ期の瓦は遠く離れた宮城県大崎市周辺で、Ⅱ期以降は多賀城跡の近くでつくられています。これらの瓦には地名*や人名が書かれたものがあり、多数の人が瓦造りに動員されました。

＊地名…那須郡（栃木県）、磐城郡（福島県）、伊具郡・玉造郡（宮城県）などがある。



「□郡仲村郷他辺里長二百長丈部呰人」

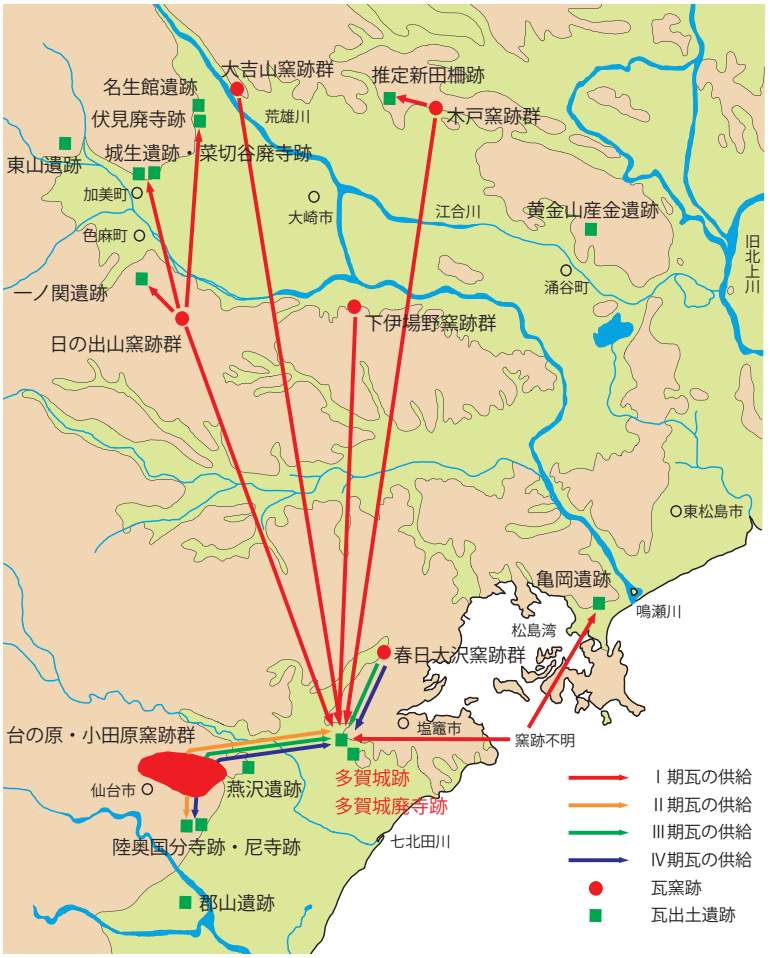
郷里制文字瓦（木戸窯跡群　東北大学 蔵）
多賀城の造営年代が郷里制施行期間（717～740年）であることを示す瓦。



Ⅰ期の瓦



Ⅱ期の瓦



瓦供給図



Ⅱ期の瓦



Ⅲ期の瓦



Ⅳ期の瓦

B 土　器

土師器*や須恵器*（→P11）が多く使われており、茶碗や皿などの食器と、鍋や釜などの煮炊き具、水や酒などを入れておく容器とがあります。他に、一般の人はほとんど使わない灰釉陶器・緑釉陶器*や磁器（→P21・27）などの高級なものがありました。

これらは形や作られ方が少しずつ変化しており、作られた年代がわかります。

＊土師器…窯を使わないで焼いた土器。黄色や赤っぽい色をしている。食器や煮炊き具が多い。
＊須恵器…窯で焼いた土器。灰色や青っぽい色をしており、堅い。食器や容器が多い。
＊灰釉陶器・緑釉陶器…釉薬（製品を堅くし、水分の吸収を抑えるための溶液）をかけて灰色や緑色に窯で焼いた土器。主に近畿・東海地方でつくられた。



Ⅰ～Ⅱ期の土器　山王遺跡八幡地区。



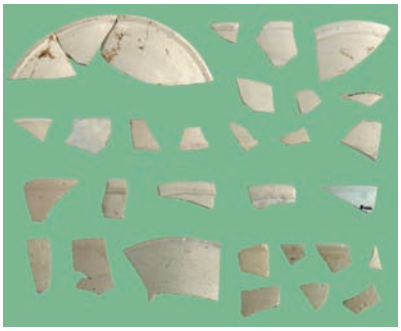
緑釉陶器　内側に花の模様が彫られている。



青磁　中国産の高級品。



Ⅲ期の土器　山王遺跡八幡地区。



白磁　中国産の高級品。





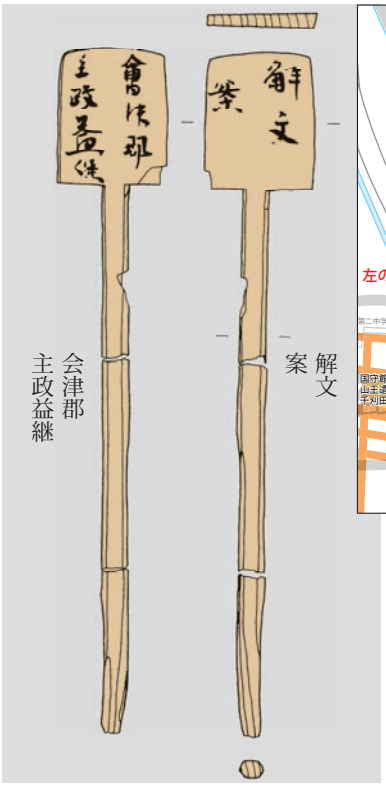
Ⅳ期の土器　左は五万崎地区、右は大畑地区。いずれも穴にまとめて捨てられていた。

C 文房具

硯、紙（漆紙→P17・19）、木札（木簡（もっかん）→P17・19）、ナイフなどが見つかっています。未発見ですが、筆や墨も当然あったでしょう。こういったものは役人の必需品でした（→P18）。

硯は現在とは違って焼き物（主に須恵器）でできており、墨をする部分が丸いもの（円面硯（えんめんけん））と四角いもの（風字硯（ふうじけん））とがあります。

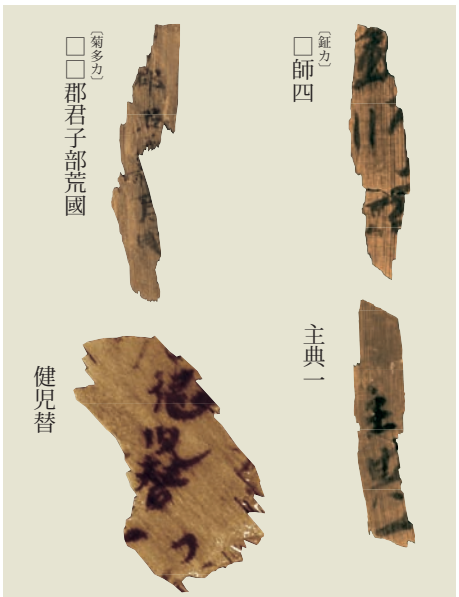
紙と木札は事務の内容によって使い分けられていました。紙にはかさばらないので保管がしやすいことや、貼り合わせると多くの文字が記入できるというメリットがあります。木札には、不要になった文字を削り取れば何度でも使えるというメリットがあります。ナイフはこの削り取りに使われました。





題箋軸（だいせんじく）

山王遺跡伏石（ふせいし）地区。紙の文書を軸に巻き付けて巻物にし、上部に文書の内容を書き、整理・保管したもの。多賀城外の町並みに会津郡の出張所があり、役人が文書整理をしていたことを示している。



木簡（削り屑）

ナイフ（多賀城市埋蔵文化財調査センター 蔵）





硯
手前2点が風字硯で、他は円面硯。いずれも須恵器と同じように窯で焼かれている。

D 漆紙と木簡

漆紙とは、漆作業の際に、漆液が乾かないように不要になった紙（文書）を蓋として再利用した結果、しみ込んだ漆のおかげで紙が腐らずに残ったもので、日本で最初に多賀城跡で見つかりました。

内容は、計帳（世帯主と家族の個人データで、課税台帳）、暦、物品の納入・請求文書、書物などです（→P19・21）。

木簡とは、木札に文字や絵が書かれたもので、荷札やまじないの呪文、個人データが書かれたもの、文字を練習したものや削り屑などがあります（→P16・19～21）



漆紙　最初に発見された漆紙文書。課税台帳で、個人名と年齢が書いてある。



木簡
個人名を列記した帳簿類。

□
□』
黒万呂姉占マ麻賣
弟万呂母占マ小富賣□
戸主同族□



丈部大麻呂　年□〔廾カ〕九左頬黒子
陽日郷川合里
（他に『丈部』などの習書がある）

木簡
はせつかべのおおまろ
丈部大麻呂の個人データが書かれている。ほかに、「丈部」や「鳥」などの文字を練習している。

この２点の木簡は政庁～南門間の道路につくられた暗渠から見つかっている。暗渠からは、ほかにも木簡や多数の削り屑が出土しており、内容は兵士に関係するものが多い。



習書のある高坏
たかつき
木製の高坏の脚部に「執」や「天」などの文字を練習している。



漆作業



漆作業用品　手前左から漆を塗るときのパレット、刷毛、漆を漉した布、後ろは漆容器。パレットや容器の蓋として紙が使われた。

6 多賀城での生活

A 働　く

役人や兵士を始めさまざまな雑用をする人々が多数集まっていました。

上級役人は、長官を始め都から派遣されてきた人々で、20 人程いました。兵士は 500 人が常駐しており、指揮する指導者も 20 人程いました。雑用をする人々は当時の規定から 700 人程と推定されています。文書作成、製鉄や鍛冶、漆作業（→ P17）、木工、物品の納入や管理、給食などさまざまな仕事をしていました。勤務時間は夜明けから正午までで、その後は自由時間でした。



役人の勤務状況
机に座って木簡を削り直している。後ろの棚には題箋軸に巻いた巻物の文書がある。



兵士の勤務状況
門の付近をパトロールしている。



鍛冶遺物
後列左から溶かした鉄や銅を入れる坩堝（るつぼ）、鉄かす、炉に空気を送る鞴（ふいご）の先端部、前列左は金属製品を研ぐ砥石、右は鉄製の鎌の刃。

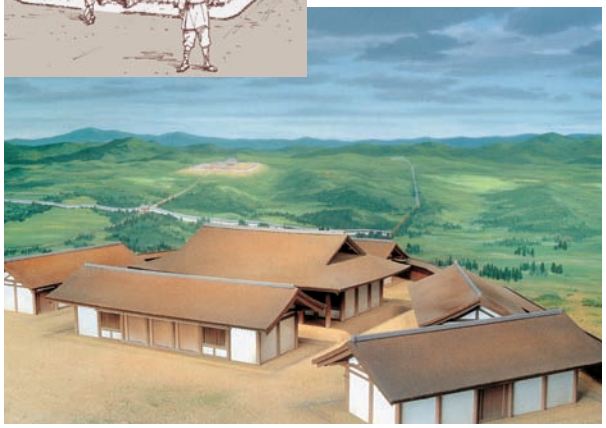
B 住　む

役人は身分に応じた広さの宅地をもらい、数棟の掘立式の住宅や倉庫を建てて住んでいました（→ P26）。一方、兵士や雑用をする人々は竪穴住居*に住んでいました。

＊竪穴住居…地面に四角い穴を掘り、屋根をかけた家。農民など当時の一般の人々もこのような家に住んでいた。



竪穴住居復元図



館前（たてまえ）地区建物跡群復元模型（提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター）
市川橋遺跡浮島館前地区。上級役人の邸宅と考えられる。



井戸
山王遺跡八幡地区。井戸枠と水溜用の曲物（まげもの）が残っていた。



トイレ遺構
金堀地区。水洗式トイレの便槽と考えられる。

C 学　ぶ

多賀城跡には「国学」と呼ばれる学校があり、「国博士」「国医師」（教師）が学生に授業*をしていたと推定されています。

役人は、文字の正確さや上手さが勤務成績に影響するので、木簡などに文字の練習（習書→P17）をしていました。



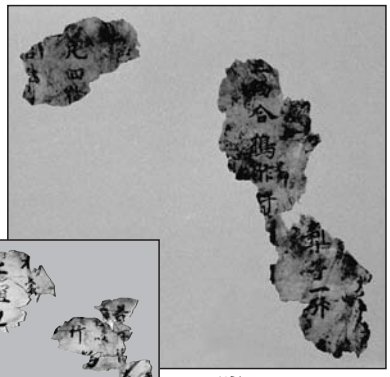
杜家立成雑書要略一巻雪寒呼知故酒飲書

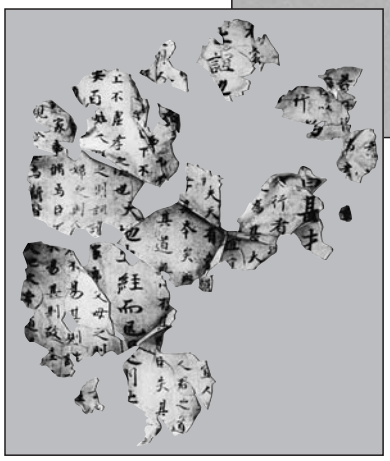
「杜家立成」木簡
山王遺跡多賀前地区。『杜家立成雑書要略』は中国から伝わった手紙の書き方の本で、木簡の文字はこの本を手本として、1字ずつ丁寧に書かれている。



（別筆）「□□□天□□六□□□」〔運力〕〔平力〕
□□財財在在観観世世音我我聞聞　×
（別筆）「□大万佐□□大徳□□年□」

「観世音」木簡
お経の一部を練習したもの。





「医方書」漆紙
生薬の名前と調合法が書かれている。国医師が医学の授業に使った教科書である。

「孝経」漆紙
山王遺跡多賀前地区。孝経を書き写したもの。孝経は中国の書物で、役人の必須の教養書。

D 食べる

食事は朝夕２回で、役人は給食制でした。城内の役所には「厨」と呼ばれた給食センターがありました。料理の種類や品数は身分によって違っていました。

米や豆、野菜、魚、海藻、塩、しょうゆ、みそなどが各地から運び込まれたことでしょう。

また、牛や馬、鹿の骨が多量に見つかっています。これらの肉は食用に、皮や骨、角は道具に加工されました。



武蔵国播羅郡米五斗
部領使□□刑部古□□〔乙正力〕

木簡
「武蔵国播羅郡（現在の埼玉県深谷市付近）」から多賀城に米を運んだときの木簡。

＊ 授業…国博士は中国の古典である「論語」「孝経」などの一般教養を、国医師は医学を教えていました。なお、生徒は郡司（郡の役人）の子供に限られていました。



国府厨印
国府の厨（給食を管理する役所）が使用した印。



カマド
多賀城廃寺から出土した土製の移動式カマド。



食事
当時の食卓にあがったものを復元。ごはんは玄米で、メインディッシュはイワシである。

E 願　う

健康や安全を願ったり、病気や不幸、災害から逃れるために、さまざまな祈りやまじないが行われました。土器や木簡、かたしろ*などに願いや祈りを込めて川に流していました。

役所や邸宅、建物を建てるときには地鎮祭が行われました。土器にいろいろなものを入れ、穴に埋めています。

占いもたびたび行われ、占いに使われた骨が見つかっています。

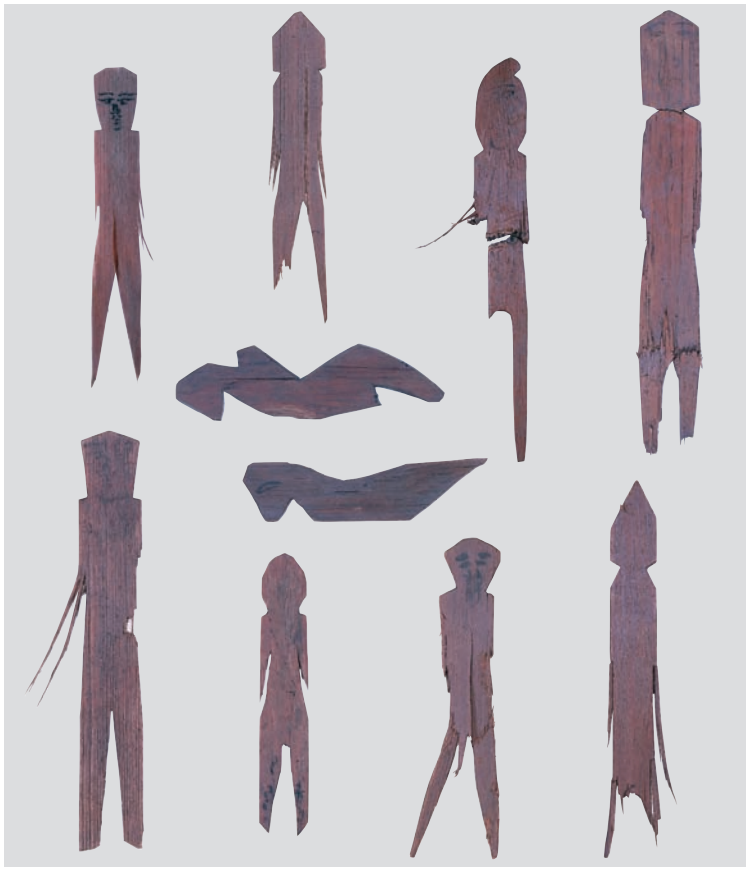
※かたしろ…本物の身代わりに薄い板でつくったもので、人形・馬形・鳥形などが見つかっている。



地鎮（じちん）の土器
大畑地区。甕の口に小皿を 12 枚重ねて載せ、穴の中に埋められていた。甕の中には小石が６個入っていた。



人面（じんめん）墨書土器
山王遺跡多賀前地区。病気などの原因となったけがれを土器に封じ込めて水に流したもの。



人と馬のかたしろ（多賀城市埋蔵文化財調査センター 蔵）
市川橋遺跡。中央の２つが馬である。



占いに使った骨
山王遺跡多賀前地区。牛や馬の骨を削り、そこを焼いて吉凶を占ったもの。



墨書須恵器　山王遺跡多賀前地区。病気が治ることを祈って、水に流したもの。

F 集・散

多賀城跡には各地から人や物資が集まったり、逆に各地へ発送したりしていました。

上級の役人は都（奈良・京都）から派遣され、陸奥国内でも会津郡の役人（福島県）が出張してきたりしました。兵士や雑用をする人々は関東地方や陸奥国各地から集められました。一方、中央へ出てさまざまな仕事に従事し、なかには異例の出世をした人*もいます。

食料や日用品、武器などは関東地方や陸奥国各地から送られてきました（→P19）。また、中国産の高級な磁器や、近畿・東海地方で焼かれた土器（→P15・27）も運ばれてきています。陸奥国からは馬や金*、漆などが送られています。

＊道嶋嶋足…牡鹿郡(宮城県東松島市周辺)の豪族の一族で、武人として出世し、播磨国（兵庫県）や下総国（千葉県）の長官になった。当時は、国の長官などは中央の貴族出身者が大部分であった。

＊金…宮城県涌谷町で産出した金は東大寺（奈良県）の大仏のメッキに使われた。



「敬福」漆紙（多賀城市埋蔵文化財調査センター 蔵）
山王遺跡八幡地区。百済王敬福は当時の陸奥国次官。後に長官となり、涌谷町産の金を奈良に送り、その功績により飛躍的に出世した。百済は朝鮮半島にあった国で、敬福はその王族の子孫。



黄釉褐彩水注・白磁
山王遺跡多賀前地区。中国産の高級な焼き物。中国から直接多賀城へ運ばれたのではなく、大宰府や都を経由して持ち込まれた。







緑釉陶器香炉蓋・灰釉陶器小瓶
いずれも東濃（愛知・岐阜両県にまたがる地方）で焼かれた高級な焼き物。



「右大臣」木簡（多賀城市埋蔵文化財調査センター 蔵）
山王遺跡千刈田地区。表裏とも「右大臣殿　餞馬収文」と書かれている。陸奥国から京都にいる右大臣へ馬を献上した文書の題箋軸。



「白河団」木簡
白河軍団（福島県）から弓の射手を送り届けた木簡。裏には射手の個人データが書いてある。

人と物の移動　遺物や文献から確認できるものを図示。陸奥国北部からは昆布や海獣皮などが多賀城にもたらされ、都へ送られた。また、讃岐国では東北地方の土器が出土している。

Ⅲ 多賀城碑

外郭南門を城内に入ってすぐのところにあり、「壺碑*」とも呼ばれ、日本三古碑*の一つです。覆屋を建てるなど地元の人々によって大切に保護されてきました（→P2）。

従来偽物説がありましたが、近年の研究や調査の結果本物であることが確定し、1998年に国の重要文化財に指定されました。

内容は、多賀城跡が724年に大野東人（→P5）によって造られたことや、762年に藤原朝獦によって修復されたことなどで、多賀城修造の記念碑です。他の文献にはない貴重な情報を伝えています。

〔銘文〕

多賀城　去京一千五百里
去蝦夷国界一百廿里
去常陸国界四百十二里
去下野国界二百七十四里
去靺鞨国界三千里
西　此城神亀元年歳次甲子按察使兼鎮守将軍従四位上勲四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歳次壬寅参議東海東山節度使従四位上仁部省卿兼按察使鎮守将軍藤原恵美朝臣朝獦修造也
天平寶字六年十二月一日

〔訓読〕

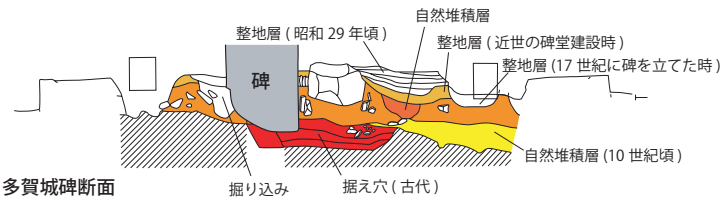
多賀城　京を去ること一千五百里。
蝦夷の国の界を去ること一百廿里。
常陸の国の界を去ること四百十二里。
下野の国の界を去ること二百七十四里。
靺鞨の国の界を去ること三千里。
西　此の城は、神亀元年、歳は甲子に次る、按察使兼鎮守将軍・従四位上　勲四等大野朝臣東人の置く所なり。天平宝字六年歳は壬寅に次る、参議・東海東山節度使　従四位上　仁部省卿　兼按察使・鎮守将軍藤原恵美朝臣朝獦、修造するなり。
天平宝字六年十二月一日

多賀城碑データ

石材：アルコース砂岩
高さ：2.48m
幅　：1.03m
厚さ：0.72m
重さ：2,800 kg（推定）

＊壺碑…みちのく（東北地方）にあるとされた大きな石碑で、平安時代以降多くの和歌に詠まれている。江戸時代以降多賀城碑が「壺碑」と考えられるようになり、松尾芭蕉も「奥の細道」の途中に立ち寄って大感激している。現在では、「壺碑」はもともと実体のないものであり、両者は同一のものではないと考えられている。

＊日本三古碑…他の二つは、那須国造碑（栃木県）と多胡碑（群馬県）。



多賀城碑断面


多賀城碑覆屋　仙台伊達藩四代藩主伊達綱村の時に（1700年前後）、水戸藩主徳川光圀（水戸黄門として有名）の勧めで建築した。写真は1998年に解体修理されたもの。


発掘された多賀城碑　1997～1998年に行われた発掘調査時の様子。碑が据えられた地下部分の状況を確認している。


西
多賀城 去京一千五百里
去郡衙國界一百廿里
去常陸国界四百卅二里
去下野国界二百七十四里
去靺鞨国界二千里
此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎮守將
軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置
也天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山
節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守
將軍藤原惠美朝臣朝猶修造也
天平寶字六年十二月一日

多賀城碑

Ⅳ 多賀城廃寺

多賀城の南東約 1 km の丘陵上にあります。仏教の力で東北地方の安定を図るために建てられた多賀城跡の付属寺院で、多賀城跡と同時に創建され、ほぼ同様の変遷をたどります。

塔や金堂、講堂などの配置は、大宰府*の付属寺院である観世音寺（福岡県）、多賀城跡の前身である郡山遺跡の付属寺院の郡山廃寺（仙台市）に似ています。

＊大宰府…律令政府が九州地方の支配の拠点として設置した役所。中国や朝鮮半島との外交窓口でもあった。



多賀城廃寺伽藍模型
中門と講堂を築地塀で連結し、内部の東側に塔、西側に金堂を配置している。講堂の裏側には僧坊や楼、倉などがある。これら全体を区画する施設は見あたらない。



多賀城廃寺　整備後の航空写真。



塔
高さ 3 mの基壇上に、心礎と 16 個の礎石がすべて移動せずに残っていた。三重の塔と推定されている。



金堂
桁行 5 間、梁行 4 間の四面廂付建物で、東向きの建物である。最終末の建物は桁行 2 間、梁行 2 間の東向きの小規模なものである。

多賀城廃寺から２km 程離れた山王遺跡東町浦地区から「観音寺」と書かれた土器が見つかり、多賀城廃寺は「かんのんじ」または「かんぜおんじ」と呼ばれていたと考えられます。

金堂は本尊仏が安置される寺の中心建物で、多賀城廃寺の金堂は東向き（塔の方を向いている）に建てられています。塔は舎利（釈迦の骨）を納めておく寺の象徴となる高層建築物で、多賀城廃寺の塔は三層と推定されています。講堂は僧侶が勉強をする建物で、僧房は僧侶が日常生活を送る建物です。他に、時を告げる鐘を吊す鐘楼やお経を保管する経楼などがありました。

陶塔や泥塔、塔が描かれた瓦など仏教に関連する遺物が見つかっています。他に、緑釉陶器や灰釉陶器、土製カマド、多量の瓦などがあります。



「観音寺」墨書土器（多賀城市埋蔵文化財調査センター 蔵）
山王遺跡東町浦地区。200 点以上の灯明皿と一緒に捨てられており、多数の灯明をともして仏を供養する万灯会に使われたものと考えられる。



泥塔
型で大量に作った小さな塔の焼き物。中にお経を収める。講堂の周辺から多量に見つかっている。



塔をヘラ書きした瓦（Ⅰ期）
五重の塔を描いたもの。瓦工人のなかには多賀城廃寺以前に、実際に塔を見た人がいることがわかる。



陶塔
塔のミニチュア模型の焼き物。



捨てられた大量の土器（提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター）
高崎遺跡井戸尻地区。多賀城廃寺の南西約 500m の場所で、３度にわたって捨てられたおよそ2,000 点の土器が見つかった。いずれにも油煙状の付着物が残っており、万灯会に使用されたとみられる。



鬼瓦
左右ともに多賀城廃寺から出土したⅠ期のもの。左は頭部が方形で、中央に蓮花文がある。右は頭部がアーチ形で、蓮花文が４個配されている。

V 城外の様子

多賀城外の南側には、東西・南北大路を基準とした道路網が整備され、町並みが形成されていました。

ただし、これらは最初から計画されたものではなく、時代とともにしだいに整備・拡大されたものと思われます。

南北大路（おおじ）は政庁～南門間道路の延長上にあり、道幅は 18m で建設されましたが、すぐに 23m に拡幅されています。

東西大路は多賀城跡外郭南辺から 550m（当時の単位で 5 町（ちょう））離れており、外郭南辺築地塀と平行しています。道幅は 12m 前後です。



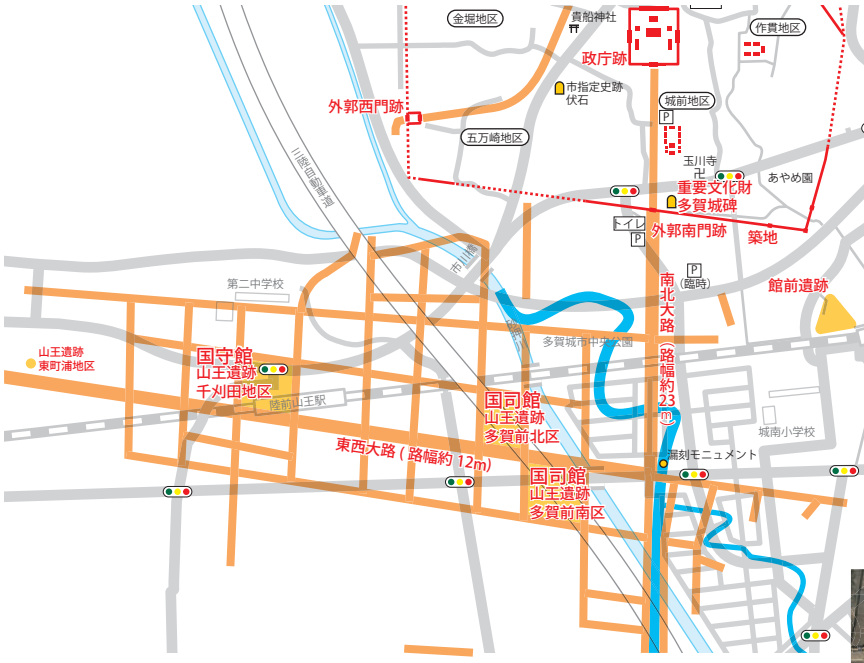
下級役人の家　山王遺跡八幡地区。



運河　市川橋遺跡。多賀城跡と砂押川を結ぶ大溝。

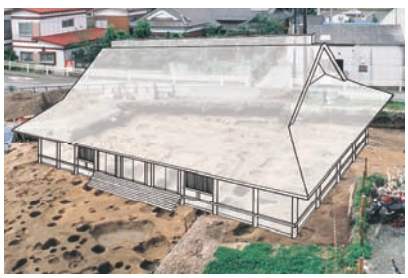


国司館（提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター）
市川橋遺跡浮島館前地区（→P18）。





国司館　山王遺跡多賀前南区。遣り水の付いた庭園がある。高級な土器が多量に見つかった。



国守館（くにのかみ）
（提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター）
山王遺跡千刈田地区。



南北大路
（提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター）
市川橋遺跡。道幅23m。



細長い建物
（提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター）
市川橋遺跡。南北大路と平行している。

大路の間には概ね 1 町（110m）間隔で小路（こうじ）があり、道幅は 3m 程です。

道路には側溝が付けられ、川には橋が架けられていました。

また、道路だけではなく、多賀城跡に物資を運ぶ運河も整備されていました。

これらが本格的に整備されるのはⅢ期以降ですが、幹線道路である大路の敷設はこれ以前に遡るのではないかという意見もあります。

道路で区切られた区画には、役人や多賀城跡でさまざまな仕事をする人々が住んでいました。上級役人は大路の近くで広い邸宅を構えていました。邸宅では宴会が行われたらしく、食器がたくさん見つかっています。一方、小路に面した小区画には下級役人やさまざまな仕事に従事する人々が住んでいました。さらに、町並みの外側には水田や畑があり、墓地もありました。

また、道路の交差点や水辺ではさまざまなまじないや儀式が行われていました（→ P20）。



小路の交差点
山王遺跡八幡地区。南北の小路がずれて交差する。道幅は3〜5m。



南北大路に架けられた橋（提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター）
市川橋遺跡。打ち込みによる橋脚が多数あり、何度も改修されたことがわかる。



南北大路と東西大路（提供 多賀城市埋蔵文化財調査センター）
市川橋遺跡。大路の交差点上空から多賀城を見る。南北大路は長さ550mの直線道路である。



宴会用の高級食器
山王遺跡多賀前地区。



宴会用の使い捨て食器
山王遺跡多賀前地区。穴を掘ってまとめて捨てられていた。

VI 関連遺跡の調査

東北地方には多賀城跡と密接な関連のある遺跡が多くあります（→ P6）。当研究所では宮城県内の主要な関連遺跡を発掘し、貴重な成果を上げるとともに、遺跡の保存にも協力してきました。

発掘調査を実施した遺跡

- 桃生城跡(石巻市飯野・太田)
- 伊治城跡(栗原市築館城生野)
- 名生館官衙遺跡(大崎市古川大崎)
- 東山官衙遺跡(加美郡加美町鳥嶋)
- 合戦原窯跡(大崎市岩出山南沢)
- 下伊場野窯跡(大崎市松山下伊場野)
- 亀岡遺跡(東松島市野蒜)
- 木戸窯跡群(大崎市田尻大嶺)
- 六月坂遺跡(大崎市田尻大嶺)
- 日の出山窯跡群(加美郡色麻町四釜)



下伊場野窯跡群
多賀城跡Ⅰ期の瓦を焼いた窯跡。



下伊場野窯跡群出土の軒瓦
（重弁蓮華文軒丸瓦/重弧文軒平瓦）





木戸窯跡群
多賀城跡Ⅰ期の瓦を焼いた窯跡。



木戸窯跡群出土の鬼瓦
頭部はアーチ形で、中央に蓮花文がみられる。



日の出山窯跡群
多賀城跡Ⅰ期の瓦を焼いた窯跡。

桃生城跡（石巻市飯野・太田）

桃生地方 (宮城県北東部) の拠点として、天平宝字 3 (759) 年末に完成しました。造営の責任者は多賀城Ⅱ期の修造を行った藤原朝獦です。

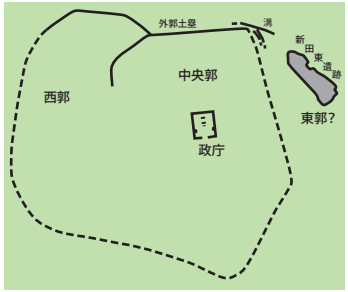
土塁と大溝で周囲を区画し、内部を築地塀や土塁、大溝で 3 つ (西郭・中央郭・東郭) に分けています。中央郭に東西 66m、南北 72m の方形に築地塀で区画した政庁があります。宝亀 5（774）年にエミシの攻撃を受け、政庁が焼かれています。



桃生城跡（南から）
中央の小高い山が桃生城跡。政庁の周辺の丘陵上には役所がある。



桃生城政庁に葺かれた軒瓦
（素弁蓮華文軒丸瓦／均整唐草文軒平瓦）



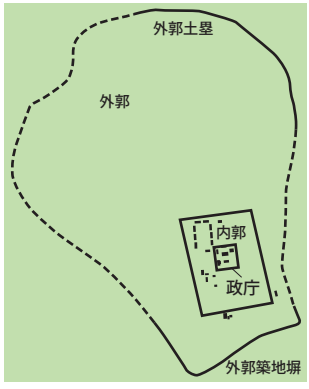
桃生城跡全体模式図

国指定史跡　伊治城跡（栗原市築館城生野）

栗原地方 (宮城県北部) の拠点として神護景雲元 (767) 年に造営されました。

築地塀や土塁、大溝で周囲を区画し、内部には長方形に区画された内郭があります。内郭の中央には東西 55m、南北 60m の方形に築地塀で区画された政庁が置かれています。宝亀 11(780) 年に伊治公呰麻呂の反乱 (→ P5) の舞台となり、東北地方の最高責任者が殺されました。

平成 15 年に国の史跡に指定され、現在も栗原市教育委員会によって継続的に発掘調査が行なわれています。



伊治城跡全体模式図



伊治城跡北辺土塁
二重の土塁と大溝で区画している。

国指定史跡　東山官衙遺跡（加美郡加美町鳥嶋）

古代の賀美郡の役所で、多賀城跡とほぼ同じ頃に造営されました。

周囲を築地塀と大溝で区画し、内部を大溝で東西に 2 分しています。東側には政庁、西側には正倉院が置かれていました。また、遺跡南面の段丘上にある壇の越遺跡では道路や上級役人の邸宅などが発見され、町並みが形成されていたことがわかりました。

エミシとの対立の緊張が高まった時期には、東山遺跡を中心とした広大な範囲を築地塀や材木塀、土塁と大溝で取り囲んでいます。



東山官衙遺跡群全体模式図



東山官衙遺跡
杉に囲まれた畑が遺跡中心部の平坦面。上方に広がる水田が壇の越遺跡。



礎石式の倉庫
突き固めた基礎の上に礎石を据えている。

参考文献

概説的なもの

宮城縣 「宮城縣史 34　資料集 V　考古資料」
桑原　滋郎 「多賀城跡」日本の美術 2　No.213
石松好雄・桑原滋郎 「古代日本を発掘する 4　大宰府と多賀城」
多賀城市史編纂委員会 「多賀城市史第 1・4 巻」
今泉　隆雄 「図説　宮城県の歴史」
宮城県教育委員会 「発掘ダイジェスト – 山王・市川橋遺跡 –」
阿倍辰夫・平川南ほか 「多賀城碑　その謎を解く」
青木和夫・岡田茂弘 「古代を考える　多賀城と古代東北」
高倉　敏明 「多賀城跡　古代国家の東北支配の要衝」日本の遺跡 30
進藤　秋輝 「古代東北統治の拠点 – 多賀城 –」
シリーズ「遺跡を学ぶ」066
進藤秋輝ほか 「特集　多賀城発掘 50 年」
月刊考古学ジャーナル 9 月号　No.604

展示解説書

宝文堂 「多賀城と古代日本」
東北歴史資料館 「発掘された古代の東北」
東北歴史資料館 「多賀城と古代東北」
東北歴史博物館 「展示案内」
東北歴史博物館 「文字世界への招待」
東北歴史博物館 「ふるきいしぶみ」
東北歴史博物館 「東北発掘ものがたり」
東北歴史博物館 「多賀城・大宰府と古代の都」
多賀城市埋蔵文化財調査センター「城柵の時代」
多賀城市埋蔵文化財調査センター「陸奥・出羽と北方世界の産物」
多賀城市埋蔵文化財調査センター「古代都市　多賀城」

調査報告書

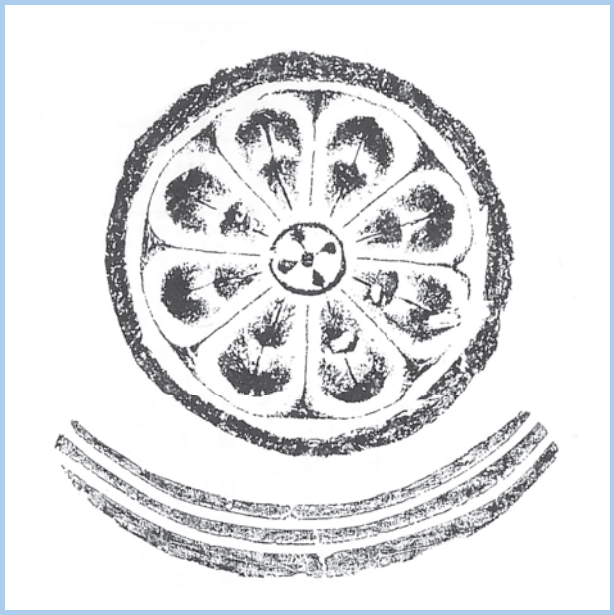
宮城県教育委員会・多賀城町「多賀城跡調査報告 I– 多賀城廃寺跡 –」
宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡」
宮城県多賀城跡調査研究所年報 1969 ～ 2009
宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡　政庁跡　本文編・図録編」
宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡　政庁跡　補遺編」
宮城県多賀城跡調査研究所 「多賀城漆紙文書」
宮城県多賀城跡調査研究所 「桃生城跡 I ～ X」
宮城県多賀城跡調査研究所 「伊治城跡 I ～ III」
築館町教育委員会 「伊治城跡」
築館町文化財調査報告書 1 ～ 15・17・19
栗原市教育委員会 「伊治城跡」
栗原市文化財調査報告書 1・4・7・9・11
宮城県多賀城跡調査研究所 「名生館遺跡 I ～ VI」
宮城県多賀城跡調査研究所 「東山遺跡 I ～ VII」
宮崎町教育委員会 「東山遺跡 X ～ XII」
加美町教育委員会 「壇の越遺跡 19– 考察編 –」加美町文化財報告書 18
宮城県多賀城跡調査研究所 「下伊場野窯跡群」
宮城県多賀城跡調査研究所 「亀岡遺跡 I・II」
宮城県多賀城跡調査研究所 「木戸窯跡群 I ～ III」
宮城県多賀城跡調査研究所 「六月坂遺跡ほか」
宮城県多賀城跡調査研究所 「日の出山窯跡群 I ・ II」
宮城県教育委員会 「山王遺跡 I ～ V」
宮城県教育委員会 「山王遺跡八幡地区の調査 1・2」
宮城県教育委員会 「山王遺跡町地区の調査」
宮城県教育委員会 「市川橋遺跡の調査」
多賀城市教育委員会 「館前遺跡」
多賀城市埋蔵文化財調査センター 「山王遺跡」
多賀城市埋蔵文化財調査センター 「市川橋遺跡」
多賀城市埋蔵文化財調査センター 「高崎遺跡」
仙台市教育委員会 「郡山遺跡発掘調査報告書 – 総括編（1）–」
仙台市文化財調査報告書 283
盛岡市教育委員会 「志波城跡」
秋田城跡調査事務所 「秋田城跡」

本書の作成に際し、下記の機関にご協力を賜りました。
心よりお礼申し上げます。

秋田市教育委員会　秋田城跡調査事務所　盛岡市教育委員会
栗原市教育委員会　仙台市教育委員会　多賀城市教育委員会
多賀城市埋蔵文化財調査センター　宮城県教育委員会　東北歴史博物館

多賀城跡調査 50 周年記念
多賀城跡　－発掘のあゆみ 2010 －

発行日　平成 22 年 9 月 23 日
編集・発行　宮城県多賀城跡調査研究所
〒 985-0862 宮城県多賀城市高崎 1-22-1
TEL 022（368）0102
印　刷　今野印刷株式会社
〒 984-0011 宮城県仙台市若林区六丁の目西町 2-10
TEL 022（288）6123



多賀城跡

―発掘のあゆみ2010―

この印刷物は再生紙を
使用しております。

PRINTED WITH SOY INK
この印刷物は大豆インキで印刷しています